



母子交姦

恋人は幼馴染みの母

屋形宗慶

挿絵 / asagiri

立ち読み版

KTC
KILL TIME COMMUNICATION



第一章	盲愛の母	ランジェリーに残る隣母の香り……………	4
第二章	純愛の母	若い牡の情欲に蕩ける未亡人……………	67
第三章	溺愛の母	育ての母が教える女体の味……………	108
第四章	熱愛の母	襦袢を濡らす股の汁気……………	155
第五章	醜態の母	衆人に三十路半ばの恥体を晒して……………	183
第六章	交歓の母	母子入り乱れ淫する交尾……………	232
最終章	至福の母	……………	277

登場人物

Characters

御室祐美

(おむろゆみ)

浮気した夫と離婚し、女手ひとつで息子の祐祉を育てている。明るく気さくな性格で、律の通う塾の講師。

鳴瀧千鶴

(なるたきちづる)

年上の書道家の夫に先立たれ、資産を相続した未亡人で、律の母親。和服を纏う落ち着いた美貌の女性。

御室祐祉

(おむろゆうし)

長身で、スポーツ万能の快活な少年。祐美の息子で、母親に似た気さくな性格。

鳴瀧律

(なるたきりつ)

鳴瀧家の一人息子。子供っぽさの残る華奢な美少年で、祐祉を兄のように慕う。



「千鶴おばさん……ッ」

長く秘めていた恋慕の情と劣情とがその瞬間混ざり合って、祐祉を千鶴の上に覆い被らせていた。

「ゆ、祐祉、さッ……いやッ、放して……ッ」

体格に勝る祐祉にのしかかられ、千鶴は弱々しい抵抗を見せる。そうして抵抗するほどに、はだけた裾は一層乱れ、胸元の襟が開いて豊満な胸の谷間を覗かせた。

「千鶴おばさん、俺、おばさんのこと好きですッ！」

熱に浮かされたように、長く胸に秘めて口に出せなかったものを吐露する。そして、彼女の首筋に顔を寄せ、体臭を鼻孔に吸い込み、白い肌を唇を押しつけた。

「な、なにを言っているの、そんな冗談、よして……」

弱々しい抵抗が、さらに弱まっていた。それは体力的な理由というより、感情的な抵抗力がなくされてしまったがためだった。

「冗談なんかじゃないッ！ 本当に好きです！ あ、愛して、るんです……」

語尾に照れの語調を交えながら口にした祐祉は、のしかかって密着した手で千鶴の体をまさぐる。

「あなたのお母さんより年上なのよ私……ッ。そんな言葉、かけていい相手じゃない

のよ……。もつと若くて、可愛い、いい相手がいるはずだから、私にそんな大事な言葉を使わないで……」

若い男、自分の息子と大差ない歳の青年に愛されているという、得も言われぬ歓喜。しかし、その歓喜と痴情に流されそうな自分を押し止める理性的な部分が、彼の言葉を否定的に捉えさせる。

「俺はッ、千鶴さんがいいんだッ!!」

強くはつきりとして、もはや否定の言葉を口にすることすら許さないような、魂の籠もった言葉。それは千鶴の理性を一気に払拭し、女として愛される喜びを呼び起こす。自らの惹かれる心が彼のものと結びつけられたのだという充足感が、歳に似つかわしくない少女のようなきめきとなつて千鶴を満たしていた。

「あッ……ああ……! そんな、わ、私いイ……ッ」

はだけた裾から露出した太腿を彼の手が撫で、その瞬間千鶴の声が上擦る。十数年もの間、何者にも触れられなかった肌を青年の手に愛撫され、忘れていた快感が時を遡つたかのように鮮明に甦る。

(体……体が、ずっと渴いていた体が、悦んでる……)

近年までは律を育てることに追われて、渴きなど感じている暇もなかった。渴き

を覚え始めたのは、律にあまり手がかからなくなり、そして祐祉が少年から青年へと変容を始めたこの数年だ。いや、そもそもずっと感じていた体の渴きを、忙しきで紛らわせていたのかもしれない。

「俺が、千鶴さんを満たしてみせますから」

ズンツと胸を強く打つ言葉だった。少女時分の初恋にも似た心の浮き立ちが、千鶴を昂揚させる。

「な、なにを言ってるんですか……こんなおばさんにないをしようっていうの……」

豊満な胸の内ではドキドキと期待が鼓動を高鳴らせた。密着する祐祉の体温を感じながら、その高鳴る鼓動を彼に感じ取られるのではないかという羞恥に、年甲斐もなく頬を赤く染める。

「俺は、千鶴おばさんが好きです。おばさんの全てを俺のものにしたい。心も、体も」祐祉の唇が、千鶴の唇を塞いだ。無防備だった唇は簡単に割られ、舌が押し入ってくる。ぬるりと口腔に割り込んだ祐祉の舌は、そこに隠れた千鶴の舌を探して蠢き、感触からその存在を見つけるや、躊躇うことなく絡みつく。

「んむうッ！」

僅かに首を振って拒絶を示してみせるが、それはあまりに弱々しい。それどころか、

舌の絡み合う時間が長引くにつれ強張った体が徐々に弛緩し、抵抗の動きが緩慢になっていく。

（あ、ああ……私、やっぱり、求めてるのね……。若い男を、彼を……）

理性や良識といった壁の向こう側、心の深いところで、すぐにでも彼のものになっ
てしまいたいというマゾヒズムにも似た衝動が湧く。未亡人となって以来、若くから
体を独り寝させてきたがために、その女体の奥底に溜まりに溜まった欲求が捌け口を
求めながら煮え滾っていた。

くちゆくちゆと、舌が触れ合い、唾液が混ざり合う極小さい音が千鶴の耳の奥で聞
こえる。味覚に広がる、自分のものではない唾液の味も懐かしく、未亡人は若い彼に
身も心も舐め溶かされるような感覚に陥っていた。

体の緊張が解けていくのを感じ取ってか、祐祉の手がはだけた裾の内に入り込む。
肌の上を滑る手の、その指紋の一つ一つが千鶴の性感を目覚めさせていくようだった。
太腿を遡った手が、内腿を撫でながらその最上流部に入り込んでくる。いよいよ女
の核心に指が達しようとした瞬間、千鶴の理性が思い出したように抵抗感を生んだ。

「んんう……ッ、い、やあ……」

小さく弱々しく、そして艶めかしい抵抗の声。同時に膝に力が入り、閉じた腿が祐

祉の手の進行を阻む。そんな様子がかえって劣情を煽るのか、少し荒々しく祐祉の手が閉じた膝を抉じ開け、彼の手はついにそこへ辿り着く。

「濡れてる」

「ッ！ ああ……」

隣家の息子に襲われているというこの状況で女陰を潤わしている。それを悟られて千鶴は羞恥の溜息を吐く。

そこに辿り着いた手は、指先で深い恥毛を掻き分けて女陰の合わせ目に潜り込む。

——にゆるう、ぬるっ、ぬるう……

千鶴が赤面を禁じ得ないほど、そこはぢゆるぢゆると女汁を漏らしていた。祐祉の指はそのぬめりを絡めながら肉の亀裂をなぞるように動き、形状を探るように陰唇の襞まで掻き分けて刺激する。

（そ、そんなに丹念に弄っちゃ……！）

刺激が加えられるほどに、重力が反転して身が軽くなるような官能に包まれる。それに比例して、女陰の奥から女汁の湧き出す量は増え、千鶴自身が股にぬるつきを感じられるほどになっていた。

「声、出してもいいですよ、千鶴おばさん」

亀裂をなぞっていた指が、その上端を弄り、隠されていた肉真珠を剥き出す。そしてそれを、人差し指の腹で磨くように擦り上げた。

「ンおッほぁアッ!!」

クリトリスから入力された強烈な快感信号に、千鶴は一声上げて仰け反り、畳に横たわって痙攣し、悶える。

（イッ、イッたッ、私、イカされたわ……）

びくっぴくっ陰核アクメの余波に豊満な女体を震わせ、その久しく忘れていた絶頂感に、今にも涙が溢れてきそうなほどの喜悦を覚えた。

「イッたんだね、おばさん。イッた千鶴おばさんの顔、すごくイヤらしいな……」

言いながら、祐祉は横たわった彼女の下方に移動し、アクメに弛緩した両膝を割る。カエルの脚のように膝を左右に広げ、普段のきっちりとした和装とはあまりに対照的なあられもない格好になった千鶴。すではだけていた着物の裾は襦袢とともに完全に捲れ、女陰に暖められそこに籠もっていた熱気混じりの湿気がムワッと立ち上った。「すごいな……千鶴おばさん、こんなに毛深かったんですね」

広げられた股の中心部は、黒く深い剛毛の密林が広がっていた。普段から着物であるため、下着による摩擦がないせいかわ濃密ではあるがあまり縮れない陰毛。だがそ

れが逆に毛を立たせる要因になって、恥ずかしい剛毛にポリウム感を与えていた。ふくよかな土手に広がる毛森は、肉厚な大陰唇まで黒い滝のように続き、肛門の周圍までを囲むように繋がっている。

濃密な恥毛に飾り立てられた女陰は、搗きたての餅のようにふっくらとした大陰唇と、その内に折り重なった花びらのように広がる厚ぼったい小陰唇を晒す。肌の色白な千鶴の中にあつてそこだけは他の部分よりも色素が濃く、陰唇のくすんだ肉色が印象的だった。

色合いこそ熟れた感のあるものだったが、その形は一児を産んだとは思えないほど綺麗に整ったままで、そのアンバランスさのある作りが卑猥さを醸し出す。

女陰を見ることも触ることも、過去に千鶴への想いを不道徳と感じて断ち切らんとして、同年の女子と関係を持ったこともある祐祉にとって初めてのものではなかった。しかし、その熟成した感のある色形、濃厚なまでの女の匂いは、初めて本物の女を目にしたような気持ちを抱かせる。ましてそれが恋した女のものと思うと、なにより彼の中の欲情を掻き立てた。

「ああ、酷い……気に、してるのに……」

十数年ぶりの本気アクメに腰砕けになっている千鶴は、恥知らずな格好になってい

る自らの下半身すら満足に動かせず、若い彼の前に醜態を晒し続ける。しかしそんな羞恥すら、絶頂の余韻を味わっている女には快感の一助になっていた。アクメの引き金となった肉真珠は一層勃起して膨らみ、毛森から顔を覗かせている。

「こんなイヤらしい千鶴おばさんの姿、見ずにいられないですよ。いいや、もっとおばさんの恥ずかしい姿が見たくまりました」

彼と同年代の一般的な男児であれば、無造作に濃く生えた剛毛や色素の濃い女陰といったものは、閉口しかねないほど衝撃的な女体の真相だっただろう。しかし、祐祉にとつてそれはなによりも極上な劣情の焚きつけだった。事実、彼のズボンの股間部分分は、今にもファスナーが壊れそうなほど張り詰めている。

「あああッ!? ゆ、祐祉さん、だめ、だめえっ、だめッへええッ！」

千鶴の体が打ち上げられた魚のようになると、口からは涎を伴って甲高い悦声が張り上げられた。

——ぢゆるッ、ぢゅぱッぢゅぱッ、ずちゆるるッ、ぢゆるるッ!

祐祉の頭が太い腿の間に入っていた。そして、彼の口は千鶴の女陰に寄り、彼女を先ほどアクメへと打ち上げた肉真珠に吸いついている。派手に音を立てて、大粒の真珠を吸い、唇に挟んだそれをグミュグミュと揉みほぐすように捏ねる。

「おおひいいいッ!! イッひっ! イッひいいンッ!!」

アクメを数える目に見えないカウンターが、目まぐるしく数字を増やしていく。敏感な女勃起は狂ったように快感の信号を発し、千鶴自身にお構いなく絶頂を強制する。千鶴がアクメの果てに気を失いそうになったとき、祐祉の真珠責めが途切れた。

「ッはあ……凄いな、おま○こが充血してぱっくり開いてる……!」

口元に千鶴の陰毛をつけた祐祉は、目を見開くような興奮の面持ちで両手の指をふくよかな大陰唇に当てると、それを左右に押し広げる。千鶴の豊満さに比例したように肉に厚みがあり、むにいと開いた女陰は肉びらがまさに花びらのように追従して、膣口までが一つの花のように開く。

充血してむっちりとした陰唇が膨らみ、まさに花びらの肉厚な薔薇を思わせるようになってくる女陰。歳相応には色素が沈着しているが、形の崩れはほとんどない綺麗な形をしたそこに、祐祉の舌が伸ばされた。

——ベロォーッ! レロッレロッレロレロレロ……!」

大きく広げた舌が、会陰から肉真珠までを大きく舐め上げたかと思うと、今度は小陰唇を震わせるかのように小刻みに膣口周りを舌先の細かい動きで舐る。

（あああッ!? 凄いいッ、凄いわッ! こんなに、こんなにも気持ちいいだなんて!



藤市郎さんとのときはこんなことなかったのに！　なんて、なんて素敵なのッ！

亡き夫との情事では感じたことのなかった、奥底から止めどなく湧き上がる悦びに、千鶴は未亡人ではなくまっさらな女として感動していた。

「ンッああハああ——ッ!!」

一際高く声を上げ、足袋の爪先が畳を搔く。ピュッと小さく女陰が汁を飛ばし、大きなアクメの波が巻き起こったことを体現していた。

「美味しいですよ、千鶴おばさんのココ……!」

熟女が迸らせる歓喜の汁を啜るように、祐祉は一心不乱に牝花にむしゃぶりつく。舐めるだけでなく、唇の間に小陰唇を挟んで引っ張るように刺激し、膣口に楔のように尖らせた舌を挿し入れてピストンさせる。それに千鶴が反応するほどに、祐祉もまた興奮の熱を上げ、二人の官能のラリーが続いた。

そうして官能の高め合いをしてしばらく、不意に祐祉の頭が股の間から離れる。激しいアクメの波状攻撃に、完全に骨抜きになった感のある千鶴は、畳の上で膝を広げたままぐつたりと弛緩しきっていた。

女汁と唾液でべちよべちよになった陰部。指の介助がなくなるとも、花のように開いたままの女陰からは、今も止まることなく新鮮な女汁が溢れ、会陰を介して尻の谷間を

伝って畳まで流れ落ちていた。

「千鶴おばさん……いきますよ」

「へ、え……？」

涎をこぼして半開きのままになっている口から、アクメに気の抜けた声を出す。そんな千鶴が祐祉の声のする方向へ目を向ける。

そこには、千鶴が十数年ぶりに目にする男の象徴が屹立していた。だがそれは、千鶴が知る男根とはあまりに印象が違う。

（お、大きい……それに太くて、なに、あの、先っぽの広がった笠……）

知らずに、ゴクン、と大きく喉を鳴らしていた。それは、並を超える逞しいペニスだった。夫であった藤市郎の、歳のせいかしよぼくれて張りのないペニス。風呂に入られてやっていった頃の、実子である律の可愛らしい蕾のようなペニス。それらとはあまりに懸け離れた、意気軒昂な若々しい勃起。浅黒く、缶コーヒーほどの太さ。長さも握り拳二つ強はある。ただでさえ大きさのあるそれは、亀頭冠の張り出した笠が高く、威圧的なまでの偉容を誇っていた。

「あ、あ、だ、だめよ、祐祉さん、それは……シちゃいけないわ……」

それは祐祉に対してでもあったが、自分自身に対する理性のリミッターが発させた

言葉だった。自分でもわかるほど、男を求めている飢えた体。今も女陰がうずうずと目の前の逞しいものを欲して切なく疼いている。それが一度、若い男を知ってしまったらどうなるだろう。その深みにはまりかねない自分を怖れ、千鶴はともすれば自ら求めてしまいそうになる衝動に必至で抗っていた。

「——千鶴おばさんを俺の女にしてもいいですか」

——ドクンッ!!

ときめいた。それは紛うことなくときめきだった。アクメの連続に弛緩した体が、ゾクゾクと心地いい震えに沸き立つのを感じる。

(やっぱり、やっぱり求めてる、私、求めているわ。抱かれることを……!)

自然に呼吸が熱を帯びる。祐祉の股間のものから視線を逸らせず、千鶴は耳まで紅潮するほどに昂揚していた。乱れた襟元から溢れ出しそうな豊乳の先では、大粒の乳首が痛いほどに勃起している。襦袢にそれが擦れるだけでも巻き起こる官能は、千鶴の最後の障壁たる貞操観念という名の壁に穴を穿っていくかのようにだった。

「ま、待って、お願い、待ってッ、祐祉さん! や、やっぱりだめよ、私には律さんがいるし、あなたには祐美さんがいる……私達がそういう関係になってしまうのは、お互いに律さんや祐美さんという家族を裏切ってしまうことになるのよ……!」

ドキドキと胸が高鳴っている。ヒビの入った貞操の壁を打ち崩す、若いペニスに犯される期待に。

(ああ、抱いて、早く、その大きなもので私を……！ あなたの女にして……！)

口で彼を制止しながら、内心は彼に自分の未亡人という殻を破られることを望んでいる。未亡人という殻を捨てて、一人の女になりたい。心というよりも女の本能として湧き上がる渴望に、その口が紡ぐ言葉とは裏腹に表情は悦びを表していた。

「千鶴おばさん……ッ！」

ぱつくりと開いた肉の花の中心に、ペニスの先端が押しつけられる。若々しく硬い男根は、厚い肉びらを掻き分けるようにして膣口を探り当てると、滴るほどに濡れた女陰の中へ有無を言わず押し入った。

——ズにゅぽオッ！！

一気に深部に突き立てられるペニス。子宮口が突き上げられ、子宮が^{ひしゃ}拉げられる。

「おおおうッ!!」

一声低く声を上げ、千鶴はビクンビクンと大きな痙攣を起こしながら歓喜に打ち震えた。貞操の壁は一撃で崩落し、彼女の中には無上の満足感と喜悅だけが薔薇色の装飾を伴って充ち満ちていた。

——ちゅっ、ちゅっ、ちゅぱっ、ちゅぱっ、ちゅううッ

湿気と熱気に満ちた口の中で乳首が吸引される。それに合わせて乳暈までも引っ張られ、律の唇の中に吸い込まれた。

「ッああああ……きもち、イイわあ……っ」

我が子に授乳していた頃を思い起こさせるその刺激に、祐美はうっとり目を細める。もごもごと口を動かして乳を吸っている律を見下ろすと、母乳こそ出ないが子供に授乳している母性の満足感に胸がすく。同時に、愛息から与えられる乳首を溶かされそうな快感が、女という生き物が持つ母性と淫欲、二つの本能を刺激し祐美をその行為に没頭させていく。

欲張りに乳暈までも口に含み、まさにむしゃぶりつくといったように吸いつく律に、まだ小さかった頃の、やはり欲張りで食いしん坊だった祐祉の姿が重なった。実子に對して実際に母乳を与えていたときよりも、母乳が出ないにもかかわらず、こうして律に乳を吸われている今のほうが母性の昂ぶりが強く感じる。それは淫欲の底上げともなつて、祐美は乳房を持ち上げている自分の手を、出るはずのない母乳を搾り出すとどうするかのように動かし、官能を昂ぶらせる。

「んっふうう……！ りっくん、吸うだけじゃなく、舌でペロペロするのよ」

祐美の言葉に、律は即座に応えた。乳量も半ばほどまで口内に収めたまま、少年は口の中でその存在感を示す尖ったニップルをピチピチと舌で弾く。

「あうんッ!?」

思わぬ痛烈な刺激に、祐美は飛び上がるように仰け反る。その動きに、律の口に咥えられていたバストトップがちゅぽんと引っこ抜かれる形になった。

「はぁん……うふふ、りっくんは上手ね。今度は、こっちを手で弄って……そして、こっちのオッパイをお口で試してみて」

引っこ抜かれ、唾液に濡れて光沢を見せる乳先に律の手を導く。そして、これまで捨て置かれていた、ジンジンと切なく疼く手つかずのニップルに少年を誘導する。

祐美の乳戯指導に、律は素直に従っていた。乳先を下から支えるように驚掴みにし、指で唾液にヌルついたニップルを爪弾くように弄り立てる。同時に、祐美自身の手によつて差し出されたもう一方の乳先に吸いついて、プリプリとしたニップルを貪るように舐め回した。

「はぁうッ、く、んはぁぁぁーッ！」

疼きが最高潮に達していた胸の両突端を愛息に颯られ、擬母は声高に喘いだ。快楽のあまり眉尻はだらしなく下がり、半開きの唇から止めどなく喜びの声漏れ、下半

身がガクガクと震える。自らの体を支えるのもおぼつかず、祐美は律の頭を胸に抱いて手洗い台に寄りかかった。

「あぁッ、イイ、ほんとに上手う……ママ、凄く気持ちよくなっちゃう」

愉悦に悶えながら、頭を抱いて乳房の中に埋めんばかりに引き寄せる祐美。それに応えるように律は一心不乱に乳先にしゃぶりつき、吸って、舐めて、その味わいと舌触りを堪能する。

乳児の頃以来、十数年ぶりに吸う乳。だが、それは乳児とは違い空腹を満たすためではなく、性欲を満たすための行為。ニップルを弄り、しゃぶるほどに、少年の股間で、若い性欲が膨らみ続ける。

「んんッ……イイいッ……！」

胸の性感を律に任せ、祐美は自らの手を下半身に送った。タイトスカートのホックを外してサイドファスナーを下ろし、それを脱ぎ落とす。下着を着けずに、肌に直接穿いた濃いブラウンのパンティーストッキング。その股部分は、すでにぐっちよりと汁を吸ってシミを広げていた。

「はぁうんッ！」

祐美はスカートを落としたその手で、直穿きパンストの上から自らのワレメをまさ

ぐる。ぐぢゅりと指にまとわりつく肉汁を掬うように、祐美は肉の亀裂を撫でると、ニチャニチャと粘つく音を立てる摩擦が悦楽を生む。

「ママ、気持ちいい……？」

「ああふうっ……！！ うん、とつてもキモチイイ……！！」

吸い舐める乳先を右、左、右と時折変えながら、律は祐美の快楽に緩んだ顔を見上げる。同時に、自らの股間で痛みを発するほどになっているペニスの疼きに、腰をモジモジとくねらせていた。

「あ、あの、ママ……」

「んはああ、んん……どうしたの、りつくん……？」

ふと止まった乳先責め。祐美は余韻の残るニップルの切なさを埋めるように、女陰を荒つぽくまさぐって刺激を加える。

「ぼ、ボク、アソコが痛い……」

祐美の胸から手を離し、ズキズキと疼痛を催す股間を押さえた。ズボンは内側から隆起し、その内の狭い空間に閉じ込められたペニスが無言の悲鳴を上げていた。

「あ……！！ ああ、ごめん、ごめんねりつくん！ 私一人で夢中になっちゃって」

つらそうな少年の様子に、祐美は大仰に詫びながら、少年の頭を抱き寄せて撫でた。

「そうよね、教室から我慢してたんだもんね。つらかったでしょ、ごめんね」

律の頭を離すと、泣き出しそうなほど眉尻を下げた祐美は、律の前にしゃがみ込む。そして、股間を押さえた少年の手をそつと除き、手早くベルトを外すと彼のズボンを足首まで脱がせた。

「ああ、こんなに先走りが出ちゃって……」

ブリーフに広がっているシミを見て、祐美は我慢していたのであろう律のことを思つて身をつまされる。

「ママがおちんちんの痛いもなくしてあげるからね」

ブリーフを引つ張つて下ろすと、ぷるんとペニスが飛び出た。これ以上はないというほど硬く膨張した勃起は、亀頭の大半を包皮に包んだまま、ザク口色に染まった先端を僅かに覗かせている。

「ママ、なにをするの……?」

期待混じりの問いかけに、祐美は含んだ笑みを見せ、先走りを垂らしそうになっている少年ペニスを指で摘んだ。

「まずは皮を剥こうね」

摘んだ指で、優しく包茎を剥く。にゆるると滑るように顔を出した亀頭は、律が我

慢を重ねた様子を示すように赤黒く張り詰めていた。

「がんばって我慢してたのね……。ね、りっくん、ちょっとここに座ってくれる？」
ペニスに詫びるような視線を送ったあと、祐美はそう言っただけで手洗い台の縁をテントと叩いて促す。

「うん」

短く答えて、律は小さく後ろにジャンプするようにして手洗い台の上に腰を下ろした。爪先が床から浮き、足首にまとわりついたズボンとブリーフが揺れる。それを祐美は子供の着替えを手伝うかのように脱がせ取った。そして、一緒に拾った自分のタイトスカートとともに丁寧に畳んで手洗い台の上に置く。

「こんなになるまで我慢して、ママを気持ちよくしてくれた御褒美をあげるからね」
ちよん、とペニスの先を指先で突き、祐美はおもむろに胸元を開いていただけだったブラウススーツを脱いだ。それを先に脱いだタイトスカートなどと一緒に手洗い台の隅に押しやると、彼女が身に着けるものは褐色のパンティーストッキングと、足に履いた黒いパンプスのみとなっていた。

そんな祐美の姿態を目の前にして、律の興奮は一段と加熱されていた。バスト、ウエスト、ヒップ。大きく張り出し、くびれ、再び大きく張り出す。グラマラスさの理

理想型のような迫力ある女体が、パンストとやややヒールの高いパンプスだけを身に着けて、豊乳や下半身の茂みを露わにしている。それは、とびきりのフェティシズムで少年の劣情を焚きつけた。無人のフロアとはいえ塾のトイレの中で、母のフェティッシュな姿態を目の当たりにしながら、それに欲情して勃起を晒しているという普通ならざるシチュエーション。焚きつけられた劣情と、それら変態的な状況が燃料となって肉欲という火勢を強める。

「ま、ママあ……」

「もう我慢できない？」

コクコクと頷く少年に笑って応えようと、祐美は手洗い台に座った律の膝を開かせて、その下半身に自らの特大の淫乳をのしかからせた。

（うわあ……ずっしり重くて、柔らかい……）

手で感じたものとはまた違ってくる印象。しっとり汗ばんで、艶やかさを見せる乳肌の体温も生々しく、彼女と触れ合っているという実感を改めて湧かせた。

ピンと上を向いたペニスを分水嶺のように真ん中に置き、左右の乳房がそれを挟む。そして、祐美の著乳が小振りなペニスを完全にその谷間に包み込んで隠した。

「あああ……なに、これえ……？」

「パイズリ、っていうの」

勉強でも教えるかのような口調で言いながら、乳房の側面を掴むように手を添え、真ん中に向かって寄せて圧迫する。

柔らかいながら、その乳圧が根本から搾るような刺激を加え、律はその新しく教えられている快感に身を任せた。

（ママのおつきなおっぱいがアソコを締めて……これ、気持ちいい……）

膣肉が締まるのとはまた違った、みっちり合わされた乳肉の間でペニスが強いの肉で揉まれる感触。教室で寸止めされ、下腹部に溜め込まれた肉欲の塊がムクムクと肥大していく。入力される官能刺激の全てを余すことなく感じようとするように、少年はペニスが埋没した乳肉の合わせ目を見つめた。

「こうやって動くともっと気持ちいいわよ」

律の腰の上に乗った乳塊を上下に揺する。ぺたん、と乳肌が彼の肌に打ちつけられて音を立てた。

「ふああつ……！」

乳肉がペニスの表面を擦ると同時に、そこからなにかを搾り出すかのように圧迫感が強まった。思わず律は腰を痙攣させて身を振り、思わぬ快感にビクビクと

打ち震える。

「我慢して切なかったでしょ？ 今度はちゃんと射精させてあげるからね」

淫猥な上気の色を乗せた朗らかな笑みを少年に向け、砲弾型の乳塊を振るよう
に上下動させ始めた。

—— たぱッ、たぱッ、たぱんッ、たつぱんッたつぱんッたつぱんッたつぱんッ

強弱緩急を織り込んだ動きで、ペニスを包んだ乳肉を揺する。打ち合わせられる肌
が手を叩くような柔らかい打撃音を起こし、聴覚にまでも官能を注ぐ。

「あああうあッ、ママッ、すごいッ、気持ちいいよこれえッ！」

一際汗ばんだ乳肌の吸いつくような感触が鋭敏な亀頭を甘く責め、両側から迫る乳
圧がペニス全体を締め上げた。

「このまま続けるからあッ、好きなときに出してねえッ！」

振り立てる豊乳の先でピンと尖ったニップルが、動くたびに律の腹部に擦れる。律
のペニスを責める胸の動きを続けるほど、祐美自身の肉欲をも昂揚させるこの刺激が、
パイズリをより熱っぽく加速させた。

加速につれて、ペニスは漏らしたかのように我慢汁を溢れさせ、それがヌルヌルと
した新たな感触の摩擦で律を悶えさせる。増していく快感に少年の腰が浮き、乳の上

下動に合わせて下から突き上げるかのように動く。それはパイズリに新たなリズムの刺激を加え、まるで乳を犯すような気分を律に味わわせ、教室で絶頂寸前まで追いやられながらも我慢を強いられた射精欲を再起爆させる引き金となった。

「あああああッ！ もうッ、我慢ッ、できないいいッ!!」

「出してッ！ りっくんの精子、ママのおっぱいの中にたくさんピュッピュッして！」
左右から圧迫する力を強める。乳房を握る手に絞られて形が大きく撓み、瓢箪のようにくびれた。

「出るッ、出る、出るッ！ 出るうッ！ んんん——ッ!!」

眉間にシワを刻み、律は腰を痙攣させ、浮いた爪先をビクビクと跳ね上がらせる。
——どびゅッ！ どびゅッ！ どびゅびゅッ！ どっびゅどっびゅどっびゅッ！

握られてくびれた両乳房の間で、少年ペニスが躍る。両側から襲う乳圧に搾られ、小振りなペニスは身動きできないまま精液を噴き出していた。

「んはああああんッ！ 熱くておっぱい焼けちゃうッ！」

乳房の狭間で行き場のない精液が、胸の谷間から湧き出すようにして外に漏れ出す。一度射精を押し止められたせいか、その吐出量は多かった。湧き水のように谷間から溢れる精液は、乳房の付け根に溜まって乳白色の温泉のように波打つ。

「すごい量……やっぱ若いのねえ」

額に薄く汗を滲ませながら、うっとり胸の間で脈打つペニスの感触と、肌を焼くような精液の熱さに、小さく細波のように肩を震わせた。

「はあっ、はあっ、ふううっ……」

精魂まで搾り出されたかのように虚脱し、息も荒く、律は後を引く射精の快感に微睡む。新たな快感の引き出し方を知った少年は、それを忘れないように心に刻むが如く、その余韻を嘔み締める。

——にゆるう……

射精が収まったペニスが、圧迫感から解放された。胸の中にすっぽりと隠されていて、しばらくぶりに姿を現したそれは、自らの吐き出した精液でべっとり濡れていた。まとめて二回分も出したような激しい射精のあとにもかかわらず、その勃起力はいささかも衰えず、ピンッと元気よく天井に矛先を向けている。

「ン、ふう……」

ペニスを谷間から抜いた乳房に残された、若さそのものを凝固させたような濃い精液。肌に張りついて、流れずに極ゆっくりと垂れ落ちるそれを、祐美は四本の指を揃えて大きく拭い取る。



この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

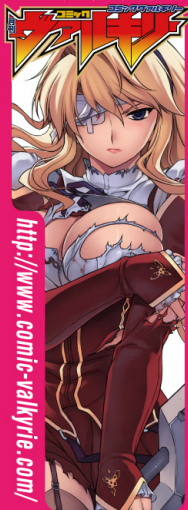
©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

<http://ktcom.jp/>

- ◎雑誌、コミック、小説の通信販売もやってるよ! **11月発売!**
- ◎二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルのパックナンバーも買えるよ!
- ◎ジャンル別で作品も選べて超便利!
- ◎二次元編集部のおいしいBlogも更新中!



KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!